
歪んだ世界の少年少女

久留間水樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

歪んだ世界の少年少女

【Nコード】

N9165W

【作者名】

久留間水樹

【あらすじ】

世界が一度滅び、そして再生された世界で主人公は真実を知ります。

少年少女たちは抗い、戦い、苦しみ続けます。

おたのしみいただければ幸いです。

プロローグ

新世紀286年。

世界は一度滅びかけ、そして再生された完全なる世界。

そう教え込まれてきた私たちには、滑稽に日々を歩んできた。何も知らず、ただ、この世界の光だけを見つめて生きてきた。

それは突然。

私達はそれを知らされることになる。

この完全なる世界が、どれだけ醜く歪んでいるのか。

立ち向かい、死に追われ、全てが敵に見えたその世界で、私達は戦った。

これは、私達の戦記であり、かけがえのない思い出である。

13歳の夏から、それは始まり、そして終わっていく。

ブログ（後書き）

ご感想、評価を頂けたら嬉しいです！
頑張って書きますのでどうかよろしくお願いします

1 画策

この街、カラクリの街は、昔、カラクリ仕掛けの絵本がこの街で有名だったことが名前の由来だ。

しかし、カラクリ仕掛けの絵本が名産品だったのは500年ほど前である。

前世紀2786年。地球温暖化は進み、資源は底をつき、食料もないのに人類は増え続けた。

食料の奪い合いから戦争が頻発し、昔の日本にあったような姥捨て山に近い知らない人々を”処分”するための施設などが作られたりした。

そのような暗黒の時代が100年続き、人類は全世界で7万人程度にまで落ち込んだ。

全盛期が100億人近くいたというのだから、かなりの減少だ。

そして、生き残った人類は気づく。

このままでは駄目だと。

人類は絶滅し、何もかもなくなってしまつと。

そして、人類は動き出した。

それぞれの土地で、新たに世界をやり直したのである。

街をつくり、畑を耕し、水を綺麗にした。

その街の一つがこの人口1426人のカラクリの街だ。

街の外と中を巨大な”壁”で区別することによって街を管理し、争いを徹底的になくさせた。

前世紀2924年、新世紀では一年。こうして人類はそれぞれの街で暮らし始めた。

これが、授業で習った人類の歴史。

そんな街で、私は暮らしている。

未来都市、といえば想像がつきやすいかもしれない。

私達の移動手段はもっぱらロボットで、シューズ型から円盤型など様々だ。

しかしそれで筋力を衰えさせつなどという馬鹿なこととはしない。体育の時間はあるし、必要最低限は自分でやらなければならないからだ。

効率の問題でロボットを使っているのであって、決して人間を衰えさせるためにロボットは使ってはならないという世界条例が出回っているのが原因らしい。

家の中ではロボットに家事をさせるのは違反であつたりと、割かと厳しい世界なのである。

「早希^{サキ}、早く学校に行こう」

幼馴染の声が聞こえたので私はカバンを持ってシューズの電源をいれた。12年間使ってきて未だに慣れないこの浮遊感は、今思えばこの街に私自身がとけ込めてないということを暗に示していたのかもしれない。

幼馴染の璃空^{リク}はいつものポニーテールをしっぽのようにぱたぱたと揺らし、

「遅いよ、もう」

と文句を言った。私はごめんごめんと苦笑気味に謝り、彼女と並んで道を滑る。

空中に作られた透明のチューブの中を滑り、学校へとたどり着く。〈聖樹学園〉と彫られた門をくぐり抜け、教室へと入ると、いつものメンバーはすでに揃っていた。

「早希、璃空、おせーぞ」

「だって早希が遅いんだもの」

メンバーの一人、蓮れんの文句を聞いて、璃空が私のせいであることを主張し、私に責任をなすりつけてきた。

まあ、いいんだけどね。

「まあまあ、蓮、もう来んだからいいだろ？早希たちも座ったら？」

「うん、ありがとう、知樹ともき」

知樹にすすめられたので、私達も蓮たちの座っている近くの椅子に腰掛けた。

蓮はしょーがねーなーという顔になりつつ、地図を広げた。

「ほら、頼まれてたやつ」

「ええ！凄い！もう用意出来たの？」

璃空が驚いて素直に蓮を褒めた。蓮はまんざらじゃなさそうに胸をはり、

「へへん。俺ができなかったことがあるかよ？」

と自慢する。私はちよつとにやりと笑って

「そうね、鶏の卵をとりにいけなかったことかしら？それとも犬の退治をしようとして逆に追い込まれたことかしらね？」

その瞬間、蓮は顔を真っ赤にして私の頭を殴ろうとして立ち上がったけど、それを知樹にまあまあと宥められた。

蓮も知樹も璃空と同じく私の小さい時からの幼馴染で、彼らのことなら知らないことはない。

同時に、私も全部知られてしまっているのだけど、別に嫌じゃなかった。

どころか、すこし安心する。

自分を理解してくれる人って、なかなかいないと思うから。

「で、見つかった？」

「いや、無理だ。」穴「ならあるけど俺らが通れるほどじゃないし、通れたとしても警報モンだな」

私の問いに忌々しそうに蓮が舌打ちした。

…そうか。

私たちは、今禁忌中の禁忌を犯そうとしている。

それは、とても危険で、そして同時に魅力的でもある禁忌だ。

外　の世界を見に行く。

人間が犯した罪を、この目でみたい。

どうして私達がこの”箱庭”で囲まれ続けなければならないのか、それを知りたい。

蓮が用意したのは、壁の”穴”がある場所が書いてある地図だ。図書館の奥深くに禁書として保管されていたのをコピーしてきたのだ。

”穴”——それは、単なる”穴”ではない。

というか、元々”壁”すらも普通の”壁”ではないのだ。

”穴”と”壁”のことを言う前に、私達の世界に充満する力のことを説明しなければならぬだろう。

神は、新世紀1年、人類に力を与えた。

その名を、”神力”という。

1 画策（後書き）

大幅に変えましたw内容w 感想や評価をいただけると嬉しいです。
「別人生」の方より疲れます（笑 説明が多いからかな？

2 神力

いきなりファジーな、と訝しむ人がいるのかもしれない。
しかし、実際に起きたのだった。

”神”と名乗る者が表れ、人類に力を与えた事件が。

通称、それは”人が神に愛された印を神自身が与えられた”――
”神印事件”と言う。

私達がまず学校で小さい時からなんども教えられ、記憶に刻みつけていないのが難しいほどの事件。

それは、人類を変えた。

しかし、どう変わったのはは分からない。

私たちは、変わってしまったあとの人間だから、変わってしまう前のことなど知らない。

でも、外でなら、わかるかもしれない。

それも、外に行く理由の一つだ。

話がそれってしまった。

”神力”――文字通り、”神の力”。それを扱うものは、”術者”と呼ばれる。

私たちは力のイメージを小さい時に定められ、魂に刻みつけられる。

私なら”籠”だ。

平たく言えば、”籠”を自由自在に操れる、というところか。

動いている物体、例えば兎がいたとする。

私は、念じるだけで、それを”捉える”ことができる。
”籠”という”力の塊”が兎を捉えるからだ。

私は、そういう捕縛系の術が得意だ。

捕縛系の術なら、学年で私の右に出るものはいない。

同時に、逆のこと——捕縛（縄や網）を紐解くことも得意だ。

そして、それは 壁 からの脱出に繋がる。

次に、 壁 のことも説明しよう。

壁 とは、実際には神力で作られた壁とは似て否になるものだ。
イメージが”糸”や”網”に近い大人達複数で、街を神力取り囲んでいる。

繭に近いかもしれない。

そして、それにはやはり綻びは生じる。

それが、蓮の言った”穴”だ。

そこに、私の”神力”のイメージが役に立つ。

その”穴”を、自分たちが通れるくらいの広さにまで、解く。

それが、今回の私の役割だ。

”穴”は、触れた瞬間に警報を鳴らす。

触れないように、そして、術者である大人たちが、異変に気づかないように。

「早希、いけるか？」

「…見てみないと、分からない」

蓮の問いに、私はあやふやに答えた。

実際、分からないし、今ここで見栄を張って通れると行って希望

を持たしたくない。

「…やっぱ、無理なのかな」

知樹が悔しそうに呟いた。

「何言ってるんだよ、お前が言い出しっぺだろ」

「…そうなんだけども、やっぱり、禁忌だからね。少し怖じ気付くな」

それには、私も同意だ。

正直、好奇心と同様に恐怖もある。

見つかってしまったら。

もし、気づかれてしまったら。

みんなも同様だったのだろう、黙り込んでしまった。

「おい、皆、座ろうねー」

ガラガラ、と扉を開けて担任の野々寺先生が入ってきた。
私達は黙り込んだまま、それぞれの席につく。

…空が、いつの間にか曇っていた。

3 いつまでも子供じゃられない

神様、というのが具体的にどんなものか、私は知らない。

そして、この力が神様から与えられたのだと教える大人は、神様のことを教えてくれない。

歴史の授業を聞き流しつつ、私はそんなことを考えていた。力、とか。

それから、命、とか。

この世界にあるものは、何もかもわからないことばかりで、私が知っていることなんて、ほんの砂粒程度でしかない。

「？結樹さん？」

はっと前を向いた。

私は昔から考え事をするとき横をむいてしまう。

教師は、それに気づいたらしい。

「どうしたの？悩み事？」

「…いえ、なんでもないです」

教師だつて大人だ。

何も教えず、私達を閉じ込めている嘘つきたち。

そう考えると、どうしても胸がざわめく。

「…先生ねえ、空が好きなの」

「…は？」

教師が、にこにこ笑顔で語りかけてきた。

私は、そしてほかのみんなも、ぽかんと教師を見る。

「だってねえ、こことは違ってとても広いでしょう？ 憧れるのよね、やっぱり」

「……」

それは私もだ。そう言いたかった。

だけど、そこまで心を打ち解けさせたくなかった。
だから私は黙って教師を見た。

「今日の授業はこれでおしまい。みんな、好きにしていいわよ」

教師は出て行ってしまった。

私達は最初こそざわめいたものの、すぐにわつと騒ぎ出す。

遊ばうとか紙飛行機を飛ばそうとか、沢山の雑音が一気に生まれ出した。

「早希、少し気分転換に行きましょう」

「……うん」

私は早希に連れられて屋上へ出た。

空には、孤独に浮いた雲と、私達に光を与えている太陽だけが存在していた。

ぽつり、と本音を呟く。

「璃空、私ね、ほんと怖い」

「……外のこと？」

一瞬で看破した璃空に、私は頷いた。
そう、私はここから出るのが怖い。

璃空は私から背を向けた。

「真実は、必ずしもいいことばかりじゃない」

「そうかもね。でも、いいことかもしれない」

「知らなくていいことを知ってしまうより、無知な子供のままでいたい」

私の我儘に、璃空は振り向き、いつになく真剣な顔でいった。

「でも、いつまでも子供じゃられない」

何も言えない。

そう、そのとおり。

私たちはただ早く殻を破ってしまいただけなのだ。

いつかは訪れるであろう、大人になるために破る、子供にだけ施される、保護の殻を。

それは、雛が生まれるために殻を突き破るように。

それは、蛹が蝶へと生まれ変わるように。

それが怖いから、早くそれを済ましてしまいたいのだ。

「大人に、なりたい？」

「なりたくない、嘘つきは嫌い」

「なら——」

「でもね」

璃空が遮った。

「知恵の果実を齧らないまま、無知で馬鹿なままにいるのも嫌」

璃空は屋上から出ていこうとした。

私は、思わず口走る。

「それを知ってしまったて、自分が変わるかもしれない？」

璃空は、頷いた。

力強く、たしかに。

「それでも、私は知らなければならないと思う」

璃空は屋上から出ていつてしまった。

私は、途方にくれて空を見た。

空を飛べたら、こんな世界から抜け出して、何も知らずに生きて
いけるのに。

鳥になりたい。

だけど、私の力は”籠”で、飛ぶことはできず、捕まえるだけだ。

それは、まるでこの”箱庭”のようだな、と私は自嘲気味に笑っ
た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9165w/>

歪んだ世界の少女

2011年10月10日10時41分発行